

海軍

南海に散った

呂号潜水艦を偲ぶ

新潟県 小川 利行

一. はじめに

かつて私たちが乗艦しておりました呂号第四十三潜水艦での生き残りとして、戦闘潜水艦の在りし日に思いを馳せながら、ここに当時の苦難を書き留めることで、南海の果てに散った十七隻の呂号潜水艦を偲ぶよすがとしたものです。

日本海軍潜水艦全部で第六艦隊を組織され、その中でそれぞれの潜水戦隊が編成され作戦行動を展開して

おりました。三十五型と称された中型二等潜水艦は舞鎮所轄の新鋭潜水艦だったので。その第一号艦が「呂号第三十五潜水艦」で、昭和十八年三月に三菱神戸造船所で誕生いたしました。続きまして三十六号、三十七号、三十八号以下全くの同型艦が神戸や、玉野や、佐世保の各造船所で次々と建造されて、「呂五十号」からは番号が飛び五十五号、五十六号の二隻となり、合わせて十八隻が誕生していったのです。

しかし、この中型新鋭潜水艦は各方面海域で敵艦を撃破・轟沈させ恐れられました。誠に残念ながら敵電波探知機や水中ソーナーに次々と捕捉されてか、やがて音信不通、消息不明となり無念の帰らぬ客となって戦死公報が発令されていったのです。

あれから数えて五十年の歳月が流れて行きましたが、

今もなお、当時のことを偲びます時には、ただただ断腸の思いがいたしてなりません。

この十八隻僚艦の中でただ一隻「呂号第五十潜水艦」が輝かしい武勲をたてて幸運の生き残りを遂げました。

二・呂三十五型潜水艦の主要装備

全長八〇・五メートル、幅七・〇五メートル、水上時速四〇キロメートル、

水中速力一五キロメートル、水上馬力四二〇〇、

水中馬力二二〇〇、機関型二十二号十型、

八センチ高角砲一門、二五ミリ二連装機銃一基、

発射管四門、五三センチ魚雷一〇本搭載、

安全潜航深度八〇メートル（実際には一二〇メートル潜航）、

定員六一名（実際には八〇名乗艦）、以上。

三・爆雷攻撃！地獄の艦内

「呂号第四十三潜水艦」は昭和十八年神戸で誕生しました。私は呉潜水学校最後の卒業生です。晴れの卒業式は新設の大竹潜水学校で行われました。第四十八期潜航術水中測的練習兵（聴音兵）の主席卒業生とし

て海軍大臣賞の栄を受け、直ちに神戸で艦装中の「呂号第四十三潜水艦」の乗組員となったのです。

実施部隊での血の出るような訓練に訓練の積み重ねを経て、いよいよ昭和十九年三月、呉港より第一次の出撃、トラック島海域での作戦任務でありました。任務を果たして帰途トラック島に立ち寄り無事舞鶴港に帰港したのです。

西松張男艦長（少佐）退艦、月形正気艦長（大尉）着任の交代があり、昭和十九年六月、舞鶴港より第二次の出撃！サイパン島に向かいました。一週間の洋上航行を続け、十一日早朝サイパン島着、午前中の半舷上陸でガラパン市内に入り、四時間の休養で島の大地を踏み、また食事を楽しんで帰艦しました。

敵機動部隊接近との情報により、直ちに攻撃し港を離れました。「右三〇度敵機！」東方上空にゴマ塩を撒き散らしたような敵グラマン戦闘機の大編隊来襲です。本艦は直ちに急速潜航に移りました。その後、水中聴音機に聞こえてくるのは多くの砲撃音・爆発音でありました。

忘れもしないこの日から、かのサイパン島玉砕戦が開始されたのです。食うか！食われるか！は戦場の常であります。敵機動部隊のサイパン攻略針路に我が潜水艦部隊が深く静かに潜航し配備についたのです。夜明け前に潜航し電池でモーターを回し水中航行を続け、夕闇が海面を包むところに浮上し、水中航行に入り、空気の入れ替えや発電機を回し電池に充電するという日常を続けておりました。

十七日二時四四分、本艦は真っ暗闇の中、敵電探に捕捉され突如艦砲射撃を受けたのです。二百メートル前方に炸裂！「急速潜航急げ」、けたたましい警急電鐘が艦内に響き渡り全員配置、十秒足らずして艦は洋上より姿を消し、海中深くへ「深さ一〇〇・」百メートル海中に進みました。

「敵駆逐右五〇度近づきます、感四！」。全速力で走る駆逐艦が刻々と近づくさまが水中聴音機で手に取るように聞こえてきます。ここ狭い聴音室が水中測的兵活躍の場所です。刻一刻迫りくる敵艦の動行を克明に艦長へ報告しております。本艦は自動懸張装置によ

り一切の動きを止めた海中で、八〇名の乗員が息を殺し、額に大粒の汗を浮かべながら爆雷防御に構えておりました。

「グワーン」「グワーン」「ビリビリ」ぐらぐらと艦は大地震を食ったように揺れ、正に鉄板が裂け切れるような衝撃が走る、五、六発の爆雷攻撃を受けました。

「距離八〇〇」と指令塔より連絡あり、時を経ずして本艦の頭上を敵艦が横切って行く音がだれの耳にも「グワーン」と聞こえてきます。今ここで一発爆雷を食らえば艦は木っ端微塵だ、脂汗が出てくる思いです。ただひたすら合掌して神仏に祈るのみでした。

頭上を通過した敵艦は洋上を円陣に走りながら反転し、またまた本艦に迫ってくる。「敵艦近づきます感五！」これ以上は耳が痛くてレシーバーをあてておれず電源を切ってしまう。その瞬間「ガガーン、ビリビリ！」強烈な右からの爆雷音と衝撃、私は落雷で近所の高い杉の木が裂かれた衝撃を知っているがそんな比ではない。この世でのたとえようがない、やはり五、六発が炸裂する。この衝撃で艦内電灯が消え一瞬にし

て真っ暗に、深海百メートル、地獄の暗闇だ。艦は後部気蓄器がやられたかツリム（前後の釣合い）が崩れ艦尻から沈み始める。二度と浮上できぬ、死だ、死が迫ってくる。必至に手探りで非常灯スイッチをひねる。電池の光がポーツとかすかに辺りを照らす、乗組員の顔が幽鬼のように浮かび上がった。

浸水の様子なし、「助かった！」と我に戻った。爆雷衝撃で艦内塗料がはげて粉末となり飛散し、霧がかかったように艦内が煙る。頑丈な海軍時計もガラス板は割れ、針が飛びゼンマイも飛び出している。覚悟とは申せ爆雷の恐ろしさはこの世ではない。地獄だし、かし負けてはいられない、沈着な勇を鼓舞し後部倉庫から一〇キロ白米麻袋を各区手渡しで最前部発射管空へ移動してツリム安定を図り、艦尾からの沈みを防止することができたのです。

再度頭上を通過した敵艦は、またまた反転しながら執拗に接近してきます。三度目の爆雷攻撃はいよいよ本艦頭上での炸裂！万事休す！「もう駄目だ、さらばこの世を」思わず合掌の束の間十七歳の若き生涯が今

終わる、とたんに故郷の生家や母の顔、兄たちの面影が脳裏をよぎりました。頭上では蒸気機関車が全速度でトンネルを走るような「グワーツ」という音をたてて今敵艦が通過して行った。

死を覚悟した我々に、再びあの熾烈な爆雷攻撃、耳が裂けるか、鉄板が粉々に砕かれると思わせる激震、失神したかのような数秒が過ぎ我に戻る。「助かった！」敵駆逐艦は本艦頭上の投下をはずれ左側への爆雷攻撃となりました。正に天祐神助！。以後左へ左へと投下を続けて去って行ったのです。

爆雷と潜水艦、食うか食われるかサイパン島玉砕戦における爆雷攻撃、地獄の艦内修羅場の様子でありました。常に死は覚悟の上でありましたが、死することより生き抜くことの重要さをもこの時に体験したのです。

夜を徹して駆逐艦にやられ、夜が明ければ危険で浮上することができません、そのまま日中は潜航が続きます。艦内空気が濁り酸素量も少なくなってきました。艦内温度も上昇、虫の息その通りで「殺してくれ！」

とあまりの苦しさに叫ぶ兵もいます。潜水艦乗りでなくてはこの苦しみが分かりません。死ぬ事より生き抜くための苦しい極限を体験しました。

戦闘不能に陥った本艦は戦闘危険海域を離脱し、第六艦隊司令部に打電、命により九死に一生を得て舞鶴港に帰投したのです。

四・呂号四十三潜の行動とその最期

その後本艦は、第三次の出撃でパラオ諸島南方海域へ、第四次の出撃は比島東南海域へと転戦してきました。毎回ながら内地が紫に霞む姿に、これで内地の見納めかと名残を惜しみながら作戦海域へと航海を続けに行ったのです。

次々と友艦戦死の報を聞きながら、五回にもものぼる出撃をなし、昭和二十年一月七日、降りしきる雪の中、七カ月ぶりで母港舞鶴に帰投したのです。大変運の強い潜水艦でありました。

母港滞在一カ月の間の艦の応急修理整備や兵員の墓参休暇、物資搭載もすませて、二月二十六日、第六次の出撃となりました。しかし運命の岐路がこの十日前

に起こりました。海軍工廠の入浴室へ入浴に行き、煮えたぎっていた浴槽に誤って右足を落としてしまい、膝下に大火傷を負い、舞鶴潜水艦基地隊病院に入院となったのです。

出撃前までには後任の水測員が発令され、私は退艦となりました。病院から出撃していく「呂号第四十三潜水艦」を見ましたとき、あまりにも悲しく溢れる涙で見送ったのでした。しかし、これが今生戦友とのこの世の別れになりました。本艦は緊迫を続ける硫黄島南東海域へと出撃して行ったのです。ついにかの地で全員戦死となってしまいました。

幸い戦後、日米調査検討資料によりますれば、かの海域にてアメリカ新鋭駆逐艦「レンショー」を撃破しており、その後、空母「アンチオ」発進の哨戒機に夜間捕捉され沈没す、とあります。

日本潜水艦史記録を見て悔やんでも悔やみきれない五十年前の悲しい出来事です。昭和二十年三月十四日、戦死公報となりました。

八十人中の一人としてこの世に生き残りました私は、生涯かけても英霊供養を忘れることができません。同じように南海の涯に散って舞鶴所轄十七隻の呂号潜水艦乗組将兵一千三百余名の御霊に対し、安らかなご冥福を心よりお祈りし、久遠の平和を御願いしまして、合掌。

【解説】

呂号第四十三潜水艦戦歴（加算調書）

昭和十八年十二月十六日（竣工）

十九年六月二十六日（神戸一呉、戦務甲）

六月二十六日～八月十六日（戦務丁）

昭和十九年八月十七日～十月十九日

（舞鶴一呉、戦務甲）

十一月十六日～十二月八日（呉、佐世保、戦務甲）

昭和二十年一月四日～（舞鶴・呉）

昭和二十年三月十四日沈没（硫黄島）

就航～沈没の間、五十日を除いて戦務甲である。

同艦の状況については、体験執筆者に任せるが、呂

号第四十三潜水艦沈没の前後、

昭和二十年三月一日 呂五十五号

三月十二日 伊第三七一号

三月十三日 呂第四十三号

三月十四日 伊第三六八号、伊第三七〇号

呂第四十三号

三月十五日 伊第三六二号

多くの潜水艦（伊・呂号）が沈没している。

敵潜水艦に依る日本船舶の喪失

昭和 年 月 隻

屯

十六年十二月 六 三一、六九三

十七年 一月 七 二八、三五一

二月 五 一五、九七五

三月 七 二六、一八三

四月 五 二六、八八六

五月 二〇 八六、一一〇

六月 六 二〇、〇二一

七月 八 三九、三五六

八月 一七 七六、六五二

九月	一一	三九、三八九	四月	二三	九五、二四二
十月	二五	一八、九二〇	五月	六三	二六一、七二三
十一月	八	三五、三五八	六月	四八	一九五、〇二〇
十二月	一四	四八、二七一	七月	四八	二二一、九〇七
十八年 一月	一八	八〇、五七二	八月	四九	二四五、三四八
二月	一〇	五四、二七六	九月	四七	一八一、三六三
三月	二六	一〇九、四四七	十月	六八	三三八、八四三
四月	一九	一〇五、三四五	十一月	五三	二二〇、四七六
五月	二九	一二三、三一九	十二月	一八	一〇三、八三六
六月	二五	一〇一、五八一	二十年一月	二二	九三、七九六
七月	二〇	八二、七八四	二月	一五	五五、七四六
八月	一九	八〇、七九九	三月	二三	七〇、七二七
九月	三八	一五七、〇〇二	四月	一八	六〇、六九六
十月	二七	一一九、六二三	五月	一七	三三、三九四
十一月	四四	二三一、六八三	六月	四三	九二、二六七
十二月	三三	一一一、五三一	七月	二二	二七、四〇八
十九年 一月	五〇	二四〇、八四〇	八月	四	一四、五五九
二月	五四	二五六、七九七	計	一、一五〇	四、八五九、六三四
三月	二六	一〇六、五二九			

(以上は米國戰略爆撃調査團報告による)

敵潜水艦による喪失艦艦名

艦名	艦種	喪失年月日	地域
沖島	特務艦	一八・一一・二五	ソロモン
夕凧	駆逐艦	一九・八・二五	比
大鳳	空母	一九・八・一八	比
雲鷹	空母	一九・九・一七	比
七号	海防艦	一九・一一・一四	比
秋風	駆逐艦	一九・一一・三	比
桃	駆逐艦	一九・一二・一五	比
二八号	海防艦	一九・一二・一四	比
朝風	駆逐艦	一九・八・二三	比
三八号	海防艦	一九・一一・二五	比
芙蓉	特務艦	一九・一二・二〇	比
松輪	海防艦	一九・八・二二	比
佐渡	海防艦	一九・八・二二	比
日振	海防艦	一九・八・二二	比
玉波	駆逐艦	一九・七・七	比
岸波	駆逐艦	一九・一二・四	比

能代	巡洋艦2	一九・一〇・二三	比
早霜	駆逐艦	一九・一〇・二三	比
武蔵	戦艦	一九・一〇・二五	比
鬼怒	巡洋艦2	一九・一〇・二六	パナイ
摩耶	巡洋艦1	一九・一〇・二三	パラワン
愛宕	巡洋艦1	一九・一〇・二三	パラワン
名取	巡洋艦2	一九・八・一九	比
鳥海	巡洋艦1	一九・一〇・二五	ミンダナオ
秋雲	駆逐艦	一九・四・一一	ミンダナオ
風雲	駆逐艦	一九・六・八	ミンダナオ
草垣	海防艦	一九・八・七	比
天龍	巡洋艦2	一七・一二・一八	ニューギニア・マダン港外
大潮	駆逐艦	一八・二・二〇	同
加古	巡洋艦1	一七・八・九	ビスマーク・ニューギニア
羽風	駆逐艦	一八・一・二三	カビエン西方
時津風	駆逐艦	一八・三・三	
六連	海防艦	一八・九・二	南洋群島

阿賀野	巡洋艦2	一九・二・二七	南洋群島	津輕	特務艦	一九・六・二七	インドネシア
海風	駆逐艦	一九・二・一	南洋群島	五十鈴	巡洋艦2	二〇・四・七	インドネシア
涼風	駆逐艦	一九・一・二五	南洋群島	敵島	砲艦	一九・一〇・一七	インドネシア
漣	駆逐艦	一九・一・一四	南洋群島	足柄	巡洋艦1	二〇・六・八	インドネシア
夕張	巡洋艦2	一九・四・二八	南洋群島	球磨	巡洋艦2	一九・一・一一	インドネシア
五月雨	駆逐艦	一九・八・二六	南洋群島	岩岐	海防艦	一九・五・二四	インドネシア
翔鶴	空母	一九・六・一九	南洋群島	霜月	駆逐艦	一九・一一・二四	インドネシア
飛鷹	空母	一九・六・二〇	南洋群島	時雨	駆逐艦	二〇・一・二四	インドネシア
大鳳	空母	一九・六・二〇	南洋群島	一四四	海防艦	二〇・二・二	インドネシア
狭霧	駆逐艦	一九・一二・二四	インドネシア	羽黒	巡洋艦1	二〇・五・一六	インドネシア
夏潮	駆逐艦	一七・二・九	インドネシア	大井	巡洋艦2	一九・七・一九	
早苗	駆逐艦	一八・一一・一八	インドネシア	敷波	駆逐艦	一九・九・一二	仏印・東南支那沿岸海域
電	駆逐艦	一九・五・一四	インドネシア	一五	海防艦	一九・九・六	同
谷風	駆逐艦	一九・六・九	インドネシア	八四	海防艦	二〇・三・二九	同
水無月	駆逐艦	一九・六・六	インドネシア	野風	駆逐艦	二〇・二・二〇	同
早波	駆逐艦	一九・六・七	インドネシア	尾久	海防艦	二〇・二・二三	同
蒼鷹	特務艦	一九・九・二六	インドネシア	五三	海防艦	二〇・七・七	同
磯波	駆逐艦	一八・四・九	インドネシア	男鹿	海防艦	二〇・五・二	中国・台湾
帆風	駆逐艦	一九・七・六	インドネシア				

久米 海防艦 二〇・一・二八 中国・黄海

二五 海防艦 二〇・五・三

若宮 特務艦 一八・一一・二三

雲龍 空母 一九・一二・一九

浦風 駆逐艦 一九・一一・二二

金剛 戰艦 一九・一一・二二

峯風 駆逐艦 一九・二・一〇

淡路 海防艦 一九・六・二

吳竹 駆逐艦 一九・一二・三〇

白鷹 特務艦 一九・八・三一

九 海防艦 二〇・二・一四

能美 海防艦 二〇・四・一四

三一 海防艦 二〇・四・一四

四一 海防艦 二〇・四・一四

七二 海防艦 二〇・七・一

六四 海防艦 一九・一二・三

昭南 海防艦 二〇・二・二五

平戸 海防艦 一九・九・二二

瑞穂 特務艦 一七・五・二 日本本土

日本本土 含南西諸島小笠原

沖風 駆逐艦 一八・一・一〇 同

白雲 駆逐艦 一九・三・一六 同

朝凧 駆逐艦 一九・五・二二 同

松風 駆逐艦 一九・六・九 同

二四 海防艦 一九・六・二八 同

長良 巡洋艦? 一九・八・七 同

五百島 海防艦 一九・九・一九 同

龍田 巡洋艦? 一九・三・一三 同

信濃 空母 一九・一一・二九 同

一〇 海防艦 一九・九・二七 同

迅鯨 潛水母艦 一九・一〇・一一 同

六 海防艦 二〇・八・一三 同

七三 海防艦 二〇・四・一六 同

五六 海防艦 二〇・七・一七 同

一三 海防艦 二〇・八・一四 同

四七 海防艦 二〇・八・一四 同

四二 海防艦 二〇・一・一〇 同

沖鷹 空母 一八・一二・三 同

霧	驅逐艦	一七・七・五	北方方面
子ノ日	驅逐艦	一七・七・五	同
石垣	海防艦	一九・五・三一	同
薄雲	驅逐艦	一九・七・七	同
一一二	海防艦	二〇・七・一八	同

上海方面根拠地隊司令部

呉淞電探基地勤務の思い出

兵庫県 高島 孝 男

(旧姓 保田)

昭和二十年一月、海軍呉警備隊勤務時、上海方面根拠地司令部付を命ぜられ、上海呉淞派遣隊が編制された。昭和十八年十二月、学徒出陣の中村中尉を隊長とし、水兵科、機関科、通信科の総勢三九名の隊員であり、炊事は水兵科の隊員が交代制である。一等兵以上、下士官六名で、他の兵は三十五歳から四十五歳の召集兵で現地で教育の国民兵であった。

呉港より佐世保港へ、翌々日、軍の輸送貨物船で上海に向け佐世保出港、四日間を要して夜九時少し過ぎたころ、上海飯田棧橋に到着した。

港の岸壁近くで仮宿泊することになったが、古い二段ベットで仮眠したが、消灯してしばらくして点灯して驚いた。南京虫の大群である。南京虫に咬まれたのは、だれもが初めてということであり、隊員の中には首筋をひどく咬まれ、後遺症的に疥癬(皮膚病)となり、長期治療を要した(治療方法については後程記述します)。

翌日、上海陸戦隊本部よりトラック数台を回していただき、呉淞電探基地へ到着しました。基地は上海より約六キロほど北に行った農村の中ほどの約一キロ平方の用地にあり、ここに陸軍の通過部隊の兵舎と有刺鉄線で区分して幾棟かの兵舎が並んで建てられていた。海軍は十三号電探一基、一二センチ高射砲二門、二五ミリ二連機関銃一基を据え付けた装備である。これから設置の基礎の大半は前設営隊により終わっていたが、わが隊がこれを引き継ぎ、完全に完成させるまでには